

になった等、お話を頂いている。

### ③ 製作グループ（物品作成等グループ）

- 今までは、集団レクリエーションであったが、内容を観察すると職員とお客様の1対1のレクリエーションであった。今回の小グループ活動によりグループワーク的になった。

3つの小グループ活動によってお客様同士のコミュニケーションがすすみ、さらに個別のレクリエーションがお客様より提案され、進められている。



- 当初の目的どおり、社会貢献を目指し、保育園や図書館を利用されている市民の方々に作品を展示し又貰って頂くことで地域の方々と関わりを持つことができた。

特に図書館には、折り紙や紅葉などをラミネートして作った持ち帰り用のしおりを提供したが、提供したその日のうちになくなるなど大変好評であった。

- 職員・ボランティアの方の中に専門的な方がおられ、販売できるようなものを製作することができた。

製作グループのにおい袋2点（犬型・ふくろう型）を譲ってほしいという方がおられ、ハートピア京都等で展示されている価格（障害者の方が販売されている価格）で販売した。



### ④ 園芸グループ

- 園芸グループは手作業や運動よりもゆっくりとデイ内で過ごしたいというお客様が多く集まった。季節的に屋外での活動が困難と判断し、屋内でテーブルの上でもできる水耕栽培を中心に活動をしていこうと当初は計画していた。カイワレの栽培から始めたが、あまりうまくいかず、水耕栽培についての興味や関心も得られず、「土いじりがしたい」との意見が多く出てきた。

- お客様の意見を重視し、予定を変更して土を使った活動に切り替え、ちょうど正月前だったこともあり、葉牡丹や南天を使った寄せ植えをすることにした。最初は職員が中心になっていたが、そのうちグループ内に意見を言うてくださったり、うまく手が動か



せない方の手伝いをして下さるリーダー的な方が出てきた。できあがった寄せ植えをデイ内に飾っていると、他のお客様からの評判が良く、「作りたい」「欲しい」という意見も出てきたので、グループのものだけでなく他のお客様のものも作成するという事で寄せ植えの活動を引き続き行い、製作グループに正月飾り用の折鶴を作成していただき、寄せ植えに飾るという製作グループとのコラボレーションも行った。

園芸グループに所属しているという意識がお客様の中にも定着し、「次は何をするのか」という声も聞けるようになり、疲れて寝ていても園芸の時間になると起き上がって参加する方、「昼寝をするけれど（園芸の時間に）起こしてください」という方も出てきた。春に向けての球根植えを提案すると土の入れ方や球根の植え方などのアドバイスもしてくださるようになった。当初予定していた水耕栽培も始め、「本当にこんなので実がなるのか」と半信半疑ながらも毎回芽が大きくなってきているかを楽しみにされている。

少し高度な活動もできるのではないかとという職員からの提案で苔玉作りにも挑戦した。飾り方についてのアイデアが出てきたり、いつも見学だけをしていた方も実際に活動をされるなどかなり満足度の高い活動となり、他のお客様からの評判もよかったため、グループ内にとどまらず、全体のレクリエーションとしても取り入れることとなった。

少し高度な活動もできるのではないかとという職員からの提案で苔玉作りにも挑戦した。飾り方についてのアイデアが出てきたり、いつも見学だけをしていた方も実際に活動をされるなどかなり満足度の高い活動となり、他のお客様からの評判もよかったため、グループ内にとどまらず、全体のレクリエーションとしても取り入れることとなった。

○ 専門的知識を持った方（職員、ボランティアを含め）がなく、最初はボランティアとのコミュニケーションもあまりうまくいかなかった為、活動に対する人員が足りなかった。また、他のグループに比べ、材料などをそろえる為の費用と時間がかかった。

しかし、寄せ植えや苔玉など結果的に非常に満足度が高く、他のお客様からの評価も高い作品ができた。他のグループに比べ、当初は消極的であり意欲的でないグループではあったが、だんだんとお客様の中に意欲や関心が出てきて、一番お客様の変化が大きかったグループのように思う。

### (3) 今回の事業に対する思い・感想

○ 作家が昼間仕事をしたり、ゆったりと話をしたり、又は独りですごすヨーロッパのカフェのような自由な社交場に当デイサービスをしたいと考えている。大人のデイサービスを目標にしている。

- 事業を進めるに当たっては、平安女学院大学のマーレー寛子先生、華頂短期大学の横見靖子先生のセラピューティックレクリエーションの理論をどれだけ現実化できるかにかかっていると考え、職員、非常勤職員に対しセラピューティックレクリエーション研修を行い、理論の理解を徹底させた。

具体的には、3つのグループがそれぞれ作品をお客様と職員の1対1のレクリエーションではなく、グループワークでの作業を心がけた。その結果お客様同士のコミュニケーションが進み、同じ趣味のお客様が新たな小グループを立ち上げられた。詩吟の愛好者がグループをつくり練習をする。ハーモニカをひとりのお客様が吹き出すと他のお客様も家からハーモニカを持ってこられ更なる小グループ活性化の動きが始まっている。

- 京都府の方々の介護予防に対する熱意が、我々の心中のものを具現化する原動力となったと我々は感じている。

地域からは、シルバー人材センターと老人クラブから個人としての参加も得られた。地域の元気老人に加え、退職直後のかたの生きがい探しとしてもお声をかけた。「人の役に立ちたい。」「時間を有効に使いたい。」「今までの技術を役立てたい。」という方々が現れた。

そのような方々の意思をくみとりながらお客様に失礼のないサービスを提供しつづけることが重要になっている。

- この事業の統計に表れない事実で、最も大切なことは、お客様、ボランティアの方々、職員の間での、またはそれぞれのコミュニケーション量の増大である。コミュニケーションの相乗効果は能力の相乗効果の基礎となっている。